

扇子といえば、一般では外出時に鞆にしのばせる携帯しやすい小型のものを思うところだが、日舞や能楽などで用いられる舞扇は閉じたときの長さ約 29 センチあまりある。広げるとその倍の長さを直径とする円の半円に近い大きさになる。演者が持てば扇は虚空を自在に泳ぎ、その先にはるか深遠な世界が広がっているように観る者は想像させられる。扇は、古来より邪気を祓うものとされ、川に流して吉凶を占う神事に用いられる祭礼具であったとされる。その象徴性が継承され、中世の縁起物語では、神仏の出現や伝説の男女の縁を象徴する場面で扇が登場し、その宿命を暗示する役割をしているという⁽¹⁾。扇に霊力が備わると信じられた古の人々は、祈りを込めて扇絵を仏に奉納もした。その事例には《扇面古写経絵図》（東京国立博物館、平安時代）がある。中世には公家や禅僧の間で複数の扇絵を貼り合わせる屏風絵が進物として珍重され、近世に至ると町人文化のなかでは、室礼に応じて住まいのなかで座の空間を華やかに演出する存在として人気となった。扇は、道具としてだけでなく、眺める対象としても長く好まれてきたのだった⁽²⁾。

眺めて楽しい扇絵とはどのようなものか。扇面の画面は不思議な形をしている。湾曲した画面に表された絵の空間は、扇の持ち手に向けて求心円をかたどっており、そこに描かれたモチーフも、その円形の空間に合わせて配置されている。扇に描かれているその場所は、円の世界ということである⁽³⁾。円の世界は天地の関係が定まらない、つまり重力の関係から解放された自由とでもいうような不思議な感覚を観る者に感じさせる。観る者が心で感じる「円」は、想像では空間にどこまでも広がっており、扇絵はその一部分を断片的に見せてくれているので、心理的に円の広がりを観る者に感じさせるのである。事物や事象を全て画面に描き込むのではなく、そのうちのどの部分をどのように切り取り表現するか、表現者の感性も見どころとなる。

部分から内的な広さを感じ取る空間の楽しみ方は、短冊作品にも共通している。わずか 10 センチ×20 センチ四方の縦に長い画面に、何をどのように描き入れるか、実は事前の着想と構成が求められ、少ない筆数で形を決めねばならないという点で難しい制作といえるだろう。この小画面からどのように画面奥の小宇宙を想像するかは、観る者の内面に託されている。内省によって、極小から永遠を思考する観点の持ち方は、日本人が自然風土のなかで培ってきた東洋的な空間概念の一つといえ、現代人の私たちも趣向する習慣を受け継いでいるかもしれない。説明を極力省き、わずかなモチーフによって、その周囲の世界を暗示的に表す。一種の謎かけのような空間への誘いを感じる日本美は、例えば、書院造の書斎の間の円窓や孤蓬庵忘筌の縁先の引違い二枚障子から眺める庭、限られたわずかな文字数で詩情を詠う俳句の世界などが思い出される。身近な日常の景色から何を選択するか、その感性を座に集う仲間とともに味わう対話の空間、かつての床の間には絵画があった。現代ではそれが洋間や玄関の一隅に場所を変え、様々な楽しみ方がより多様化している。今回の課題の精神はここから出発している。

このたびの本講座において、指導講師により提案された課題テーマ、扇面と短冊を組み合わせた制作による展示は、作品ごとに個性が光っている。絹絵に彩色するという制作工程では、日本画の伝統的な技法を駆使しつつ、作者一人ひとりが自身のテーマを決めて3点の「組み合わせ」による世界表現に挑戦しており、それぞれの作品はアイデアで溢れ、観る者にさまざまな物語があるように想像を掻き立たせる。いつの間にか心の内で作品との対話が溢れ出てくる感がある。絵画を眺める楽しみを思いながら制作した喜びが伝わってくる。

（はらだ ちかこ・中部大学民族資料博物館）

（註）1 安達啓子「扇流し図屏風の源流試論-扇面絵画論序説」（日本女子大学紀要 人間社会部 第22号、154-135頁）2011年参照。

2 水尾博「扇面構図論」（国華第六拾六編第八冊、245-251頁）、「日本の美術」No.310「扇面画（古代編）」至文堂、1992年、No.320「扇面画（中世編）」、No.321「扇面画（近世編）」至文堂、1993年参照。

3 小山清男「扇面図の構図について」（図学研究 33号、127-132頁）1999年参照。